

## NPO パートナーシップ協力プログラム 事業終了報告書

団体名：NPO ガラパゴス

代表者名：小柳由加里

### 1. 事業名

障がいをもつ子どもたちのための放課後等デイサービス事業所整備事業

### 2. 事業カテゴリ

3. 事業期間      2022年1月17日 ～ 2022年7月31日      (196日間)

### 4. 契約金額

2,550,000 円

### 5. 担当者名

小柳由加里／木須亮太

### 6. 事業目的

被災後の仮活動拠点から、被災前と同等以上の機能をもった事業所へと移転・整備することで、障がいをもつ子どもたちの居場所をつくり、彼らとその家族が安心して生活できる地域づくりに貢献する。

### 7. 事業の成果

事業開始の2022年1月より、新拠点を見つけるべく、多方面に対して情報提供を依頼。地元の不動産屋、空き家対策を行われている特定非営利活動法人 空家・空地活用サポート SAGA 様への協力を依頼した。空家・空地活用サポート SAGA 様から、1件の打診を頂いたが、立地面の5m先が国道となっており、安全面を考慮した結果、断念。また、地元の不動産より数件の案内を頂いたが、賃料の面や施設面積の兼ね合いで、契約には至らなかった。

この報告書を作成している現在も、引き続き調査を継続している。

仮拠点の武雄青陵中学校（2021/8～2022/4 までお借りした）には、引き続き利用をお願いし、4月末までの利用許可を頂いた。違う場所での活動となる事で、最初は、利用者の不安も見えたが、徐々に慣れることでこれまで通りの活動が出来た。また、子どもたちの適応力の高さを改めて感じる事が出来た。

同時に旧北方事務所の仮復旧を、おもやいボランティアセンター様に依頼し、作業を行って頂いた。

2021/12 から、解体後の掃除を始めた。作業の多くは、ボランティア様のお力をお借りし、時間が掛かりながらも進めて頂いた。約3ヶ月間の作業を経て、4月の初旬に完成した。部分的には、完全に元通りとはいかない部分もあったが、活動は十分にできる環境が整った。

本事業で予算計上させて頂いた人件費、車両経費、ガソリン代などのお陰で、遠方への活動も減らすことなく、月に1, 2回ほどの課外活動が出来た。以下、主な活動先は、

1月：マクドナルドでの買い物体験、注文体験。祐徳稲荷神社（佐賀県鹿島市）への初詣 など12名

2月：金立公園（佐賀県佐賀市）10名

3月～7月：佐賀バルーンミュージアム（佐賀県佐賀市）はたらく細胞展（福岡県北九州市）、ガラパゴス基山（佐賀県基山町）、嘉瀬川ダム河畔公園（佐賀県佐賀市）、河川公園やすらぎの里（長崎県東彼杵）、鏡山（佐賀県唐津市）、有田にて絵付け体験（佐賀県有田町）、動物園（熊本県熊本市）など、たくさんの場所へ行くことができた。

5月には、旧拠点の仮復旧が完了し、建具やサッシなど、必要最小限の費用を掛け復旧した。

また、内装のクロスやカーペットについては、株式会社サンゲツ様より一部物資提供を頂き、コスト面では大変助かった。水害前とまったく同じとはいかなかったが、壁紙は自由に選ばせて頂き、子どもたちが喜びそうな柄を選び、貼る事ができた。新しい内装を見た子どもたちは、気持ちも上向きになったようで、日に日に楽しそうな笑顔が増えてきた。

半面、管理者としては以前と同じ場所での活動に不安が大きく、備品の導入に関しては、躊躇する部分も多くあった。重要な書類関係は、別の事務所に保管するよう対応した。

新事業所の整備については、休眠預金を利用することを前提に、新しく土地の購入と建屋の構築を計画し、申請を行ったが、予算面を含め、初回の提案は不採択、新たな事業案に変更し再申請。新たな事業案は福祉避難所としての機能を持たせ、有事の際に家族で避難できる施設を賃貸で準備する事と、利用者の周辺の環境を整えるための案を合わせて提案、採択に至った。新事業は8月からの開始となる。

報告日現在、新しい場所への移転は出来ていないが、支援拠点として旧施設を復旧させたことにより、支援を継続しながら、引き続き、移転場所を探すことが出来ている。

## 8. 事業種別（コンポーネント）ごとの成果

### (1) コンポーネント①

調理体験器具は、回復させた拠点では、十分な活動に利用できた。

最近では7月9日たこ焼き作り、28, 29日にパン作りなどを行った。家庭内では、保護者が危険との思いから刃物や鍋等の利用を経験したことがない利用者が多い。そんな中でも、1つ1つ丁寧な支援を行うことで、安全に調理体験できることができ、利用者の笑顔も多く見る事ができた。家でもやってみたいとの声も多くあった。

事務所機能として必要な、電話機、PC用のハードディスク、ネットワーク構築ができた事で、データの共有が出来るようになった。作業を各スタッフで分担することや、クラウド上に保存するシステムなどの活用につながった。しかし、ハードウェアを旧事務所内に設置することは、水害対策の観点から考えても危険があるため、水害に遭わない別の場所へ一部の機器を移転させることも検討中である。

防犯カメラの設置は、防犯に関するよりも子ども達の様子を記録して後の会議に活用できた。

具体的には、利用者同士のトラブルが起こった際に、何が原因で始まったのかを検証し、その際のスタッフの配置、他利用者との距離感などを確認。その結果から、スタッフの行動を見直すことが出来た。

会議は、隔月に開催し、スタッフの支援技術の底上げにつながった。

会議の開催は、3月5日（土）10名、4月16日（土）10名、6月18日（土）9名。

## 9. 事業全体を通じて得た教訓や課題等

放課後等デイサービスなどの福祉事業全般に言えることで、利用者に対して、支援をすればするほど、スタッフの人数は必要となり、経費は増えていく事となる。単純に利用者の数を増やし、売上に繋げる事を行うと、支援自体が手薄となり、本来の支援の形を離れていく事となる。

令和元年、3年の二度の水害という災難が加わると、運営自体が立ち行かなくなることが分かった。

そんな中でも、パートナー協働事業にて、継続に繋がれたことは、大変有意義であった。このような一過性の資金とは別に、安定的な資金調達の方法を考える必要性を、強く感じた。

福祉事業とはいえ、いち民間企業であることには変わりがなく、公的な支援を必要としながらも適切な補助金、助成金がない、もしくは営利団体では受けることが出来ないという事に課題を感じた。

この事から、佐賀県を通じ文科省、厚労省への働きかけることが出来るよう、佐賀県の担当機関とのやり取りを始める予定である。

障がい児を取り巻く災害時の避難環境は、まだまだ取り残されている部分であり、今後は、国、県、市町、地元の住民方、すべての方々にお声掛けを行い、広く認知して頂く事をすすめていきたい。今後は、休眠預金を利用した福祉避難所を整備し、有事の際には、放課後等デイサービスの仮拠点として活用できるよう準備をすすめていく計画である。

今現在は、水害に遭った場所へ備品等の納入をおこなっているが、毎年、出水時期には不安を抱えたままになるため、一部の備品、書類についての管理は、別の場所へ移動させる必要性も感じている。

## 10. 協力体制の構築

2019年の1回目の水害時より、公益社団法人 Civic Force、地域のボランティア団体である、おもやいボランティアセンターをはじめ、佐賀県鹿島市を拠点として活動されている任意団体ボランティア DIWA には、農家からの農産物の提供や、夏祭りとして焼きそばなどの炊き出しをお手伝い頂いている。そのほかには、【株日本スーパー電子（埼玉市見沼区）】ハピネスプロジェクトという名称で社内のボランティア活動をされているところから、引っ越しのお手伝いや、掃除、片付けの支援を頂き、今後のつながりも出来た。平時から関係性を繋いでいくには、どうすればよいのか今後も検討していきたい。

## 11. Civic Force との協働について

ガラパゴスの事情をよく理解していただき、子どもたちへの配慮をしていただいた。また仮拠点の状況への対応も頂き、納品が難しい備品類に関して、業者預かりを承諾いただき、大変助かった。

今後の支援体制について、どのような形での協働が可能か今の時点では、明確なイメージが無いが、良い方向性が見つかるよう、話し合いをお願いしていきたい。